

樺太・大泊のスキー場

藻岩レルヒ会会長 原田 廣記(恵須取)

樺太のスキー場の歴史は、明治四十四年の第一回樺太全島冬季競技大会に始まる。

豊原で大会が開催されたが、大泊・真岡・恵須取にもスキーの魅力が広がりを果たした。

冬の移動手段として、人は和式カンジキを使っていたが、樺太では露式カンジキ(ストー)後のスキーが多く使われていた。深雪でも移動が速く、便利である。樺太庁では、これを樺太全島に広めようと冬の競技大会に取り入れることにしたのが、前述の第一回樺太全島冬季競技スキー大会である。大泊町では学生を中心にスキー熱が広まり、ノルディックスキーの会場としては大泊中学校周辺を中心にコースを作り、アルペンスキーの会場は大泊高等女学校横にコースを作り、近くの急斜面を利用したジャンプ台も作ったのと同じに大泊高等小学校の裏山(神楽ヶ丘)にもコースを作った。(写真)



大泊神楽ヶ丘スキー場

大泊地方は早速中学生や社会人にスキーの講習会を実施した。スキー講習の内容は、オーストリアの軍人テオドル・エドラー・フォン・レルヒのスキー技術で一本杖スキー(ストック)が一本で約1メートルの長さ、スキー板は長さ約1.5メートルから1.7メートル、幅約十五センチから十八センチの単板で金具は靴の前部分を固定し、かかとが上がるリグラメンであった。

講習内容はスキー研究目的として①積雪地方に於ける軍事上及び一般交通上のスキー利用法。②体力鍛錬の補助たらしむるにあり。

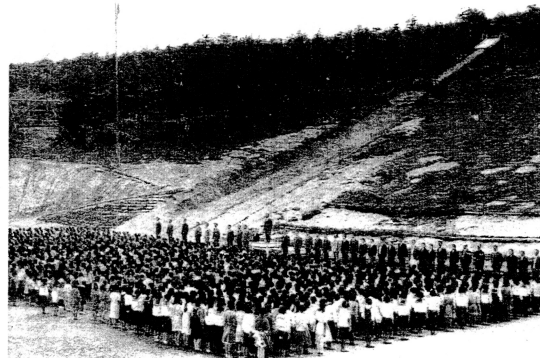


大泊小学校スキー場

スキー術は①基本演習

起立法、直立行進、登行、横行、滑降中止、方向転換、制動滑降、横滑り等。②応用演習―障害物通過、難路通過、斥候・連絡兵、運搬法、テレマーク及びクリスチャニア法等を中心に指導をされた。また、用具の取り扱い方も詳細に教えられ、その結果、第三回樺太全島スキー大会では大泊中学校の生徒が入賞した。(写真)

冬の深雪を移動手段として利用してきたスキーだが、やがて競技スキーへと変わるようになり、目黒教諭が指導をしていたレルヒのスキー技術は一本杖(本ストック)とスキー板は幅が広く重たく野山や坂の多いところで活用されていたが、距離競技には向かないものだった。そこにスエーデン大使館勤務の杉村虎一公使から送られてきたスエーデン式のスキー板は平地滑走用でスキーの幅は狭く軽くて、しか



ジャンプ台

も金具はスキー靴の前方のみを固定するものでス

トックは二本で距離レース用の物であった。スキー競技大会が進むにつれて二本杖(ストック)が有利になり距離競技ではスエーデン式・ノルウェー式がスキーの中心になつてきた。

また、ジャンプ用・回転競技用はアルペンスキー板とスキー用具はヨーロッパから新しい物が取り入れられた。

特に大正四年には、樺太日日新聞の記者として金井勝三郎氏が豊原に着任する。金井記者はレルヒのスキー技術を伝承し、井記者は二年間の樺太在職中、すべての時間を割き

くノルウェースキーに乗り換え、二本杖を使用した。この結果競技には圧倒的な速さ・強さを発揮した。

一方、真岡ではスキー指導していた樺太国境警備隊に配置された軍人日澤中尉を講師に迎えスキー講習会を開き中央スキー倶楽部を結成した。

大泊では、大泊中学校の目黒教諭を講師にスキー講習会を開催していたが、金井記者のスキー講習を受けた受講生は目を見張るほどの上達があった。金井記者は二年間の樺太在職中、すべての時間を割き

全生命をかけて、樺太スキー技術の開発に打ち込んでいた。やがて、門下生から樺太を代表するスキーヤーが誕生する。

樺太でもスキー板の製造に取り掛かる。馬そりを作っていた店や下駄屋が手作りのスキー板を製作するようになった。

(参考資料)

・樺太日日新聞
・大泊史
・スキー三国志
(著者：瓜生卓造氏)
・樺太・遠景と近景
(著者：松村孝雄氏)
・日本スキー教育本
(著者：堀内文次郎少将)